



どんなに
ちい
小さくても

むかしむかし ほし
昔々、お星さまの
かがや よぞら はなし
輝く 夜空でのお話。

ねしず ちじょう む
寝静まった 地上に 向かって

ほし てん
キラキラ星が、天から
あたた かがや はな
暖かい 輝きを 放っていた

それなのに、はなばなしさの
なか ちい ほし
中で 小さな 星が
な
泣いている。



ほくの^{ひかり}光って、
そんなに^{あか}明るくないなあ。
ほくのことを^み見える
^{ひと}人なんて、いるの
かしら？

^{うちゅう}「宇宙で ^{いちばん}一番 ^{ちい}小さな ^{ひかり}光、
それが ボク。

^{ちじょう}地上から ほくの ^{ちつちやな}ちつちやな ^{ひかり}光が
^み見える ^{ひと}人なんて、いるのかな？

^{まわ}周りの ^{りつぱな}りつぱな ^{ほし}星たちは みんな、
それぞれの ^{ばしょ}場所で
がんばってるのにな。

みんなが ^{あか}あんなに 明るくて、
ほくの ^{かお}顔が ^み見える ^{ひと}人なんか、
いないよね？」



あ～あ。
だれも、わたしが
ねす
寝過ごしたのに
き
気づかなかった
なんて。

すると、空の^{そら}向^むこうから
てんし
天使の^{こえ}声^がする

かな
悲^{こえ}し^なそう^な声^でさ^さや^いて^る。

「わたしも^{ちい}小^さい^の。」^{おさな}幼^いい
てんし
天使^が泣^なき^なが^ら言^いっ^た。

「わたし、^{ねす}寝^す過^ごし^ちや^った^のに、
わたしの^{こえ}声^が足^たり^ない^こと^に
だれも^き気^づか^なか^った^のよ。」



おさな てんし
幼い 天使が ぐつすりと

ねむっていたころ、

おびただしい かずの てんし
数 の 天使は

よどお うた
夜通し 歌っていた。

かれ うた
彼らが 歌っていたのは、

てんごく よろこ み うた
天国の 喜びに 満ちた 歌。

だけど、ちつちやな こえ
声 が

た
足りないのに だれも

き
気づかなかったよう。

はるか かなたの
地上ちじょうからも、
泣きべそを かく
声こえが 聞こえてくる

それは なみだくん君。
ちっぽけな ちっぽけな
なみだくん君！

「ぼくは、だれにも
愛あいされず、知しられも
しない、たった
ひとつぶの なみだ。

名なも なく、たった
ひとりで ひっそりと
お 落ちてただけ。



ぼくが ものがた 物語るのは、
悲かなしみや きずついた
気きもち、心こころの いた 痛み。

それは、人ひとが 落おち込こみ、
愛あいする ひと 人たちが
別わかれなくては
いけときない時。

だけど、ぼくは それ
以上いじょうの ことが したい。
幸しあわせを ものがた 物語れたら、
最さいこう高たかなのに。

みんなに よろこ 喜びを
信つたえられたら
いいのに！」それが、
なみだくん君の ねが 願い。

ホタルも、みんなに
かな
悲しみを もらした。

「ぼくには ^{なん}何の
とりえも ない。ただの
ちっぽけな ^{むし}虫だもの。

ちょうちょには きれいな
^{いろ}色と ^{ゆうが}優雅さがある。

だけど、ぼくは ただ
^{とまわ}飛び回るだけで、^{なん}何の
^{よろこ}喜びも もたらして
いない。



^{とり}鳥だったらなあ。

それか、すてきな
^{かお}香りの ^{する}する
^{はな}花だったら
よかったのに。

そうすれば、いつだって
その ^{うつく}美しさを
^ふ振りまくのになあ。

だけど、ぼくには ^{いろ}色も
^{かお}香りも ない。ただの
つまらない ^{むし}虫だもの。

こんなに ^{じみ}地味じゃ、
^{まんぞく}満足できるわけ
ないよね。」



てんごく かみさま あいじょうぶか
天国では、神様が愛情深く
みみ
耳をかたむけておられた

こころ いと
心から愛しい、これらの
ちい もの かな
小さな者たちの悲しい
き
なげきを聞いておられた。

ちい もの
「小さき者たちよ、いったい
なに
何をなげいているのかい？」
こえ かみさま
やさしい声で神様が
たずねた。

「わたしは おまえたちを、
こころ
わが心のままに、カンペキに
つく
造ったはずだがね。」



ちい ほし かがや
「小さな星よ、輝いてごらん。

おさな ひつじか しょうねん
幼い羊飼いの少年のためにね。

かれ こころ よろこ
彼は、心に喜びをもたらして

くれる、お前の小さな輝きを

さがもと
探し求めているのだよ。」

かみさま ちい ほし
神様は小さな星にキスすると、

おさな ひつじか かがや
幼い羊飼いにその輝きを

み
見せた。

そら み あ しょうねん こころ
空を見上げた少年の心は、

よろこ み
喜びで満ちあふれた。



ちじょう ほくさ
地上では、干し草の つまった
か ば あか
飼い葉おけに 赤ちゃんが
ねている

かみさま おさな てんし む
神様は 幼い 天使に 向かって
やさしく 言った

いと てんし
「愛しい 天使よ。おまえには
こころ ともりうた ようい
心地よい 子守歌を 用意して
あるんだよ。

こ な
わが子が 泣かぬように、それを
うた
歌っておくれ。」

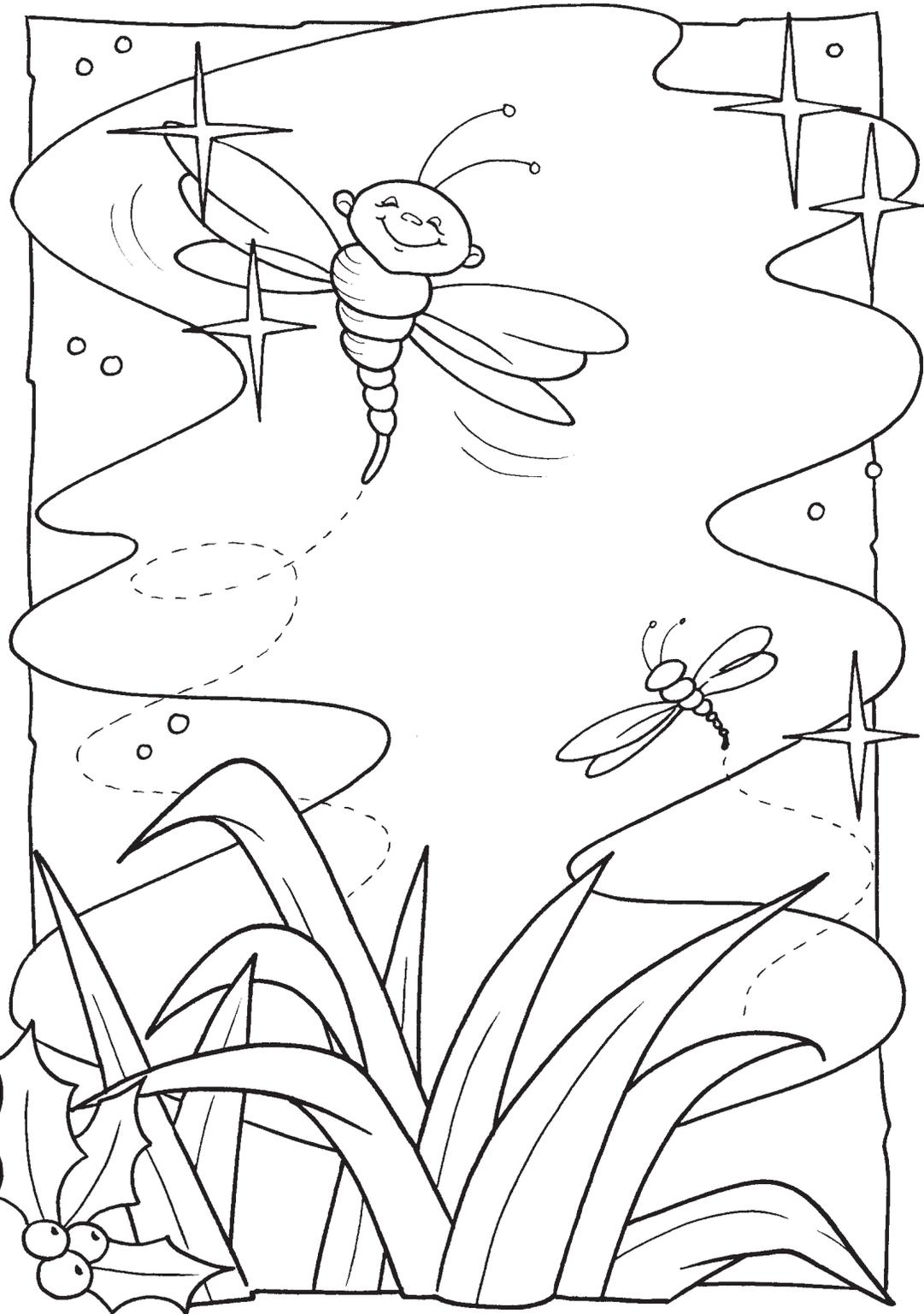


「そして、^{いと}愛しいひとしずくの
なみだよ、^{きみ}君は おどろくべき
^{こうふん}興奮を ^{えんしゅつ}演出することになる

^{きみ}君を ^め目から ^{あか}こぼす 赤んぼうの
^{ははおや}母親にね。

^{かのじょ}彼女の ほおを ^{つた}伝い、^{かのじょ}彼女の
ほほえみに キスをするんだ。

^{あい}愛する者よ、それこそ、^{きみ}君の
^{ばしょ}場所ではないか。」



「それは そうと、わたしの
ホタル君は どこだい？」
かみさま 神様は その夜 たずねられた。

「どうか、今夜 地上に 生まれた
ばかりの わが子のために
ま 舞ってくれないかな。

きらめきを 放つんだ。暗闇は 君を
ますます 輝かせて くれるだろう。

ホタルよ、わが愛する 子のために、
ふたた 再び くるくる まわ 回っておくれ。」



そういうことで、ホタルは ^ま舞い、
^{てんし}天使は やさしく ^{うた}歌い、

^{ほし}星は ^{あか}明るく ^{かがや}輝き、なみだの
^おしずくも 落ちた。

みんな ^{ちい}小さな ^{もの}者たちばかりだけど、
^{かくじ}各自が ^{かみさま}神様の ^{かんぺきな}カンペキな
^{けいかく}ご計画に ^そ沿って ^{むかしむかし}昔々の
ある ^{クリスマスに、その}クリスマスに、その
^{やくわり}役割を ^は果たしたんだ。

文：カチューシャ・ジュステイ

絵：アグネス・リメア

デザイン：松岡陽子

Copyright © 2010年、ファミリーインターナショナル

"As Little Ones"--Japanese

関連の読み物はこちら ⇒ [ぬり絵、子供のための物語、クリスマス、満足、幸せ、詩](#)